松沢哲郎のこと(8)

小嶋祥三

杉山幸丸さんからメールが来て、松沢が「居直った」という。松沢は Inference に今西錦司について、ナニヤラ書いたようだ。その末尾に霊長研の現状や、研究対象について、霊長類を越えて哺乳類に拡大すべき、と述べ、今西に倣い「霊長類学は変わるべき時に変わる」という言葉で文を終えているようだ。わたしは今西とは異なる立場で霊長類研究を行っていたので、松沢の文章の末尾の部分以外は言うことはない。今西の後継者を自認されている方が多く、憤慨されている方も多いようなので、この点はそれらの方々にお任せする。

霊長研が廃止、縮小されたのは、松沢の研究費の不正が原因である。「霊長類学は変わるべき時に変わる」というが、松沢の研究費の不正により、外部からの非学問的な圧力で、変わらされた。このような変化を霊長研の研究者らはだれも望んでいなかっただろう。松沢は自分の不正が霊長研、霊長類研究の解体、分断の原因になったことを、一言も触れていない。松沢はこの事実を認めたくないのだろう。それを認めたら、彼の輝かしかった、栄誉と称賛の人生が崩壊してしまう。そう思っているのだろう。それで、今西錦司の力を借りて、自らを保とうとしたようにみえる。

また彼は、研究対象を霊長類から哺乳類へ拡大すべきと主張している。その理由は、今やフロンティアは未踏峰でなく、月や火星かもしれないので、それに倣って、霊長類から研究対象を拡大すべきだ、と。何ですか、この子供のような類推は。松沢が対象としていたチンパンジー研究でも、未開拓、未踏峰のテーマはあっただろう。フロンティアが地球外に拡がったのは、科学技術の進歩があったからだろう。チンパンジー研究も進歩した科学技術を取り入れることで、新しい領域を開拓できるかもしれないではないか。学際的研究の利点は、このような点にあるのだ。それとも、このような主張はあの「野生動物研究センター」の設立のムリな理由付けなのだろうか？

追加したくなったので書く。松沢はあのような文章を書くべきでなかった。自分が正しいと思っているのなら、科学者らしく、正直に事実を書いて京大を批判すればよかったのではないか。あのような文章は松沢自身を貶めるだけだ。そして、これまでの彼の業績にも疑問を持たせるような文章だ。

雑誌 Inference を外国人は読むだろうが、事情を知っている日本の研究者も読むかもしれない。そして、日本の、また事情をある程度知っている外国人研究者の、松沢に対する評価が好転するとは思えない。むしろ、逆効果だ。(2022/09/15 訂正、追加)